

いづみ

1982年8月
特集号



大阪いずみ市民生活協同組合
羽曳野市野68-1 ☎ 0729(39)1000
●発行責任者／川島利雄 ●編集／機関紙委員会

第四集

私の戦争体験



この子らの明るい未来のために語り継ぎます。

心の涙



団野 征子（柏原支部）

昭和十七年夏、私達一家は国策にそい某開拓団、団員家族として、新たな希望に燃え躍進、北満の地札蘭屯外に入植、原始的な生活の中にも意欲をもやす毎日でした。

翌十八年春、同期団員の人と結婚、十九年八月末に女兒出産、働き者で子ほんのうな夫はよく可愛がり、世話をしてくれました。少々ドモリですが、娘はとても上手でいい声でした。子供をあやす子守唄等もよく唄ってくれました。「ねんねんころりよ坊の愛さ限りない、千本松原小松原」この部分の歌詞だけは今もはつきりおぼえています。

二十年の五月十日、体が小さいため兵役のなかつた夫にもとうとう赤紙がとどきました。その当時は老人と障害者以外の男性はほとんど兵隊にとられていきました。大切な大切な人達ばかりなのに……。出発までの三日

まで、昭和十六年まで神戸で働いていました。昭和十六年まで神戸で働いていました。外国人貿易会社は、大東亜戦争のため閉鎖され、同時に解雇されたのです。

昭和十二年七月五日支那事変以来、十六年十二月八日大東亜戦となり戦争時代に入りました。日一日と戦争も苛烈となり食糧事情も悪くなり、食糧統制といって、物が不足となり、政府の方針により、一人一ヶ月五百円以上は使えない状態であり、お金があつても物が自由に買えない状態がありました。

私は勤めを終えて帰宅後も、町内会で防空演習等を行い、婦人部も日夜防空活動を続けておりました。日夜敵機の来襲を受け、二〇年三月十七日午前一時より大空襲、四時解除となりましたが、私の住んでおりました神戸市の半数の家屋は炎上、死傷者も数万にのぼったと聞きます。私も被害者の一人で、家は消失しましたが、家族はいち早く山手のトンネルに避難しており全員無事でありました。

空襲を受ける前に、田舎のある人は次々と疎開し、私も日用品以外の家財道具を田舎に送つており、その後、岡山の田舎に疎開致しました。混乱の状態の中で家財をなくした人も多くあり命からがらの生活でした。食糧は底をつけ、老人子供は栄養失調で次々とたおれただけでした。

昭和二十年八月十五日、私は岡山の田舎で終戦の報を聞いたのでありました。その時の気持は敗れたとは云え、家族全員が無事で済んだことが何よりもほっとしたのであります。



空襲に住む家を奪われて

私も生活のため、田舎で米を安く買い、神戸までやみ米を運んだのでした。時には警察の手入れを受けたことも、列車にはやみ物資の運搬で数多くの人が乗っていたのでした。

現在のように物が豊富になっている時、こ

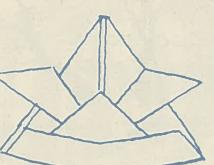
間、身辺整理の忙しい中、つとめて子供をおぶったりだいたり、夫の心中を思いやりながら、笑いにこまかす三百間でした。

「必ず帰つて来るから子供とるすをたのむ。体に気を付けて、しっかり待つてろや」死ぬかも知れない事は、誰も皆腹の中にしまつて……。その日私は娘をだいて門口でボンヤリ夫を見送りました。頭の中は空っぽなような感じで二〇メートル程先の部落の土塹の門の所まではなぜか行けなかったのです。

夫の姿が門外の彼方に消えたその時、私の胸というか心といおうか、体の奥で何ともいよいよのないむなしさ、悲しさ、そしてつらい淋しい思い、それにも増した腹立たしい心を何にぶつければよいのか。体中に瞬時に走った感情が今度はどうと涙になつて、自分ではどうにもとめようのない号泣となつて、声を限りにあたりかまわず、泣いて泣いて泣いて泣きつくしゃがて泣きつかれ、子供のよう泣きぬ入りしたのをおぼえています。

それ以来、私の涙は少々の出来事では出なくなりました。泣いておられぬ立場になつたせいもありますが……。その年十二月、夫はシベリアチエンボワー収容所で亡くなつていました。

そして二十三年に夫の遺骨がかえり、福井の夫の実家で葬儀の時、骨箱の中には名前を書いた一枚の紙きれが入つていただけでした。悲しみより腹だちの方が勝つて涙も出ませんでした。親類知人の人々はさぞかしあきれいでいた事でしょう。けれどこれは当人でな

明治・大正・昭和を
生きて

永井 丈一（初芝支部）

私は現在九十三歳になる老人であります。人生の終着駅にたどりつこうとしている今日までの長い一生の間に戦争にまきこまれたことは幾度か、六歳で日清戦争、十五歳で日露戦争、この時は私の兄も二十五歳で出征致しました。

この歳になつて今日までも、何故戦争を起すのか不思議でならない。人間一生百年もなかなか生きられるものではない。一部の人間の私利私欲のため、数多くの人が不幸になつて良いものであろうか、尊い人間の生命が戦争によつて奪われてよいものであろうか、今私と共に生活している孫やひ孫たちの将来に戦争が起らず平和が続くことを祈つてやまない。

産後四日目に命がけの
避難

母の手記より

岡村 淑子（泉北支部）

ければぜつたいにわからない氣持です。

三十八年前に流した涙が、夫のために心から流した一生に一度の眞の涙だったのです。いつの世もいろんな形の死にたいする悲しみの涙はあります。けれども、人間を無視したもぎとられるようなおそろしいまでの悲しい別れの涙は、これから時代の人達には絶対に流させたくはありません。

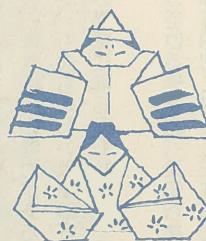
私共の様な経験をした人達がだんだん少なくなつていくので、せめて一つの事柄でも、次の世代の人々に何とかたえてゆかねばと願っております。

に満ち足りていた。

明けて二十七日、大和旅館がソ連に接収される事になり、この日友達は全部出て行った。何時までここに置いていたらけるか解らないが、まだ歩く事は無理だから、もう少しお世話になることにお願いする。

二十九日、明日はソ連が入って来るから、日本人は一人も居れないとの事。夕方六時頃、お父さんはフトンや衣類を持てるだけ背おつて、お母さんは隆坊をオント、淑子をダッコ。食糧水筒を持ち着物も着れるだけ身につけ、産後四日目の身で二キ先まで歩かなければならぬが、無理は解っていても命がけ。途中が危ないためお父さんは「早く早く」と急がすけど、気ばかりあせつて足が動かない。地べたに釘付けになりそうな足を引きずり、やつと目的地についた時は動けない程だった。元日本人の住宅であろうか、皆空屋になつてるのでここに居を構える。男は全員家の外の警備に当り、食事以外は家の中に入る事はない。竹や木でヤリを作つたり、石を拾つたりで武器の準備もしなくてはならない。ついこの前までは一人一個のピストルを持っていたのに、全部取られて治安の悪い今の不安をどうすることも出来ない。

九月一日、今日は朝から外がざわざわしている様で、皆おちつかない。今日で淑子が産まれて一週間になる。後腹の痛みがとれず寝返っていたが、午後満人數百名が手に手に棒や石を持って、家の回りを取り囲んだ。皆、石や砂を家の中に持ち込み、衣類は身



「空襲」に奪われた亡き友を偲ぶとき

「もう今日は皆殺しかも知れない」とお父さんが小さい声でボソリ言つた時は、思わず両手を合わせ、一発の弾で死なせて下さい、家族皆死ねますように、神様にお祈りしていました。

昭和二十年七月九日、堺の空は真赤に燃えた。そして、一夜にして古い街は焼土と化した。あの時の無残な人間の姿、街の光景は、決して脳裏からぬぐいされず、三十七年たつた今も昨夜のように思い出される。

私が女学校一年生で、セーラー服にあこがれていたものの、品不足で全国統一のスフ入りの制服にモンペを履き、雑のう、防空頭巾を左右にかけての登校であった。上級生は軍需工場へ動員されたが、幸いにも私達は授業は受けられたものの、警戒警報が発令されると急いで下校を命ぜられた。電車の動く間は良

田中登志子（新金岡支部）

いが途中で止つてしまふ時もあり、恐る恐る家路につく事も度重つて。同級生にKさんという友達が居り、市中から離れた所に疎開されていた。Kさんは三人姉妹で捕つて成績が良く明朗でみんなに親しまれ、わずか三ヶ月机を並べ勉強した友であつたが、今でも私の目の前に彼女の笑顔が浮かんで来る。堺が焼ける十日程前も、途中電車が止つてしまつた。私の家には歩いても近かつたので、彼女と二人、恐る恐る家にたどりつき、B29の通り過ぎるのを待ち、警報が解除されるのを待つて、二人は喋べり、遊んで、別れた様に思う。

九日夜、無気味なサイレンと同時に飛び起き、母と弟と三人で身の周り品を入れたトランク等を持って壕の中でもうすくまりながら、そっと頭を出して飛行機から次々に投下される焼夷弾を、母に叱られながら恐怖の時間を過ごした。焼夷弾はまるで仕掛け花火の様に燃え広がり空まで赤く染め、夏の夜空は明るくなつた。私の家は市中から離れていたが、近くに金岡連隊があり、高射砲があつたので隣人達もリヤカーに荷物を積み、たんぱの方へ向かう人もあつたが、私達は防空壕で、飛行機の去るのを待つた。無事我が家は助かったものの、近所のはずれの家や田んぼには相当投下されたらしく、命からがら家路につく人、けがをした人もあり、恐怖の一夜であった。

翌日赤い目をしながら、定期考査の時期だったので、休めば先生に叱かられるという気が

持と、堺の中心部があれ程ひどくなっているとは知らず、親に止められながらも、友達と一緒に歩いて学校へ向かった。今の三国ヶ丘高校（元中学校）あたりもあちこちが被災されており、方違神社まで来た時、トタン板の上に寝かせて来られる女の人の腹部に目がゆき私は恐ろしさと悲しみで足がすくんで動けなくなつた。直撃を受け腸がはみ出でいたのであろう。横で娘さんらしい人が泣きながらついて行つた後姿がいたましかつた。私は、学校が焼けた事を聞き、もうこれ以上行けないし、途中から引き返し、どうにか家にたどりついたが、私はその日は寝こんでしまつた。

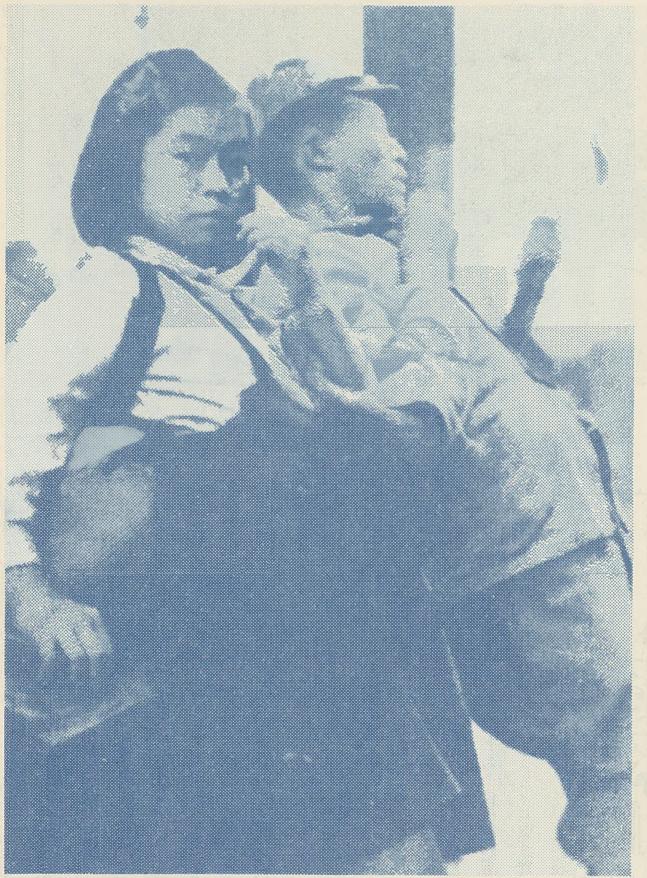
私の記憶も確かでないが、何日かして登校してみると、体育館とわずかな教室が残つて居るだけ、級の何人かはあの日以来登校されなかつたが、Kさん姉妹三人の消息は死を以て報じられ、私達は悲しみに靈を弔うのみであった。あの日に限つて姉妹が元の家へ帰られ空襲に会わたとの事で、さぞかし、熱かつただろうと悔むばかりである。あのにこにこしていた彼女はあの日から姿を見せなくなつたのである。

堺の中心に流れる土居川、今は工業地帯となつた大浜に水を求めて被災された方は逃げられ、暑くなつた川で多くの犠牲者が出たと聞いて、さぞかし、熱く、苦しく、もだえてゐたのである。

戦争は何の罪もない人間の命を公然と奪い去つて行くのである。「靖国の母・妻」と言わせて来たらしい。百二十名がひと固まりになり、あつちに追われ、こつちに追われる。子供達は恐れ泣き叫ぶ。男は泣かすなど怒る。少し離れた家に連れて行かれた。六畳二間のまま、石や砂が雨アラレの如く降る中を外へころげ出る。この時はソ連と満人と打ち合おこつたり。七時頃突然石を投げる、砂をまく、ガラスを割るで満人が家中へなだれ込んで来た。「危ないから外に出る」との命令に着のみ着上に綿入れ丹前を着せ、毛布にくるんでダッコ。汗だくだくで隆坊が泣くのをなだめたり、おこつたり。

七時頃突然石を投げる、砂をまく、ガラスを割るで満人が家中へなだれ込んで来た。「危ないから外に出る」との命令に着のみ着のまま、石や砂が雨アラレの如く降る中を外へころげ出る。この時はソ連と満人と打ち合おこつたり。

「時計を出しなさい」「お金を出しなさい」「指輪出しなさい」。金歯を出せと言ひ出したのには、引き抜かれるかと身ぶるいがしました。お父さん、お母さん、隆宏、淑子の四人は室の隅に座り毛布をかぶつた中に入り、



『買ひ出し』。戦争が終つても食べるための苦労は続きました



子どもたちも動員されて防火訓練のバケツリレー

「たつ友人が沢山います」。淡淡と語ってくれるAさん。「私にはもう一人の兄がいます。兄は被爆者手帳を持っています。でも私は持っていないません。私は検査をしても何も出なかったんです。だから被爆者手帳は持っていないません。つい最近、被爆した兄は原爆記録フィルム（人間を返せ）を見た後、一週間何も喋らず何も食べず寝こんでしまいました。私は兄が死んでしまったのではないかととても心配しました。被爆者にとって本当に忘れない、當時を語る事はとてもたえ難いつらい事なんでした。

戦争を知っている先生方、又知らない先生方はどのように平和について子供達に教えて下さっているのであるか。子供達は何も知らないのである。お上の命令だけで教育され、戦場へ教え子を送ったかっての先生方は、今どう考えて居られるのか、私は知りたい。

ナジム・ヒクメットの「死んだ女の子」の原爆の詩の一節に、「あの時も七つ、いまだも七つ、死んだ子はけっして大きくならないの」とあります。どうして死んだ子は大きくならないの。七月九日死んでいたKさん

何が何だか理解出来ず、大人達がほつとした様に「日本が負けた」と教えてくれ、恐怖から覚めたのだった。

それからの教育は百八十度変わり、憲法が新しく生まれ、主権が国民に存することを宣言され、第九条では戦争の放棄、軍備及び交戦権の否認が明確にされた。

しかし今、私達の周囲にあるものはなんだろうか。戦後教科書も何回か書き変えられ、自衛隊は昔の軍隊以上の戦力があるとの事だ。テレビで、ものものしい戦車の行進を見ると、時代の錯覚に陥るのも私だけではないだろう。

戦争を知っている先生方、又知らない先生方はどのように平和について子供達に教えて下さっているのであるか。子供達は何も知らないのである。お上の命令だけで教育され、戦場へ教え子を送ったかっての先生方は、今どう考えて居られるのか、私は知りたい。

六月に移動青空市を行った時の事です。私はその時、ある人と出会いました。その方の名前は坂にAさんという事になります。後日説明会に伺ったもののAさん一人しか集まらず、三〇分程で話は済みました。でもAさんはいつのまにか意気投合し、平和について、現在世界各地で行われている戦争、広島・長崎に使われた原爆など夢中になって話していました。突然、Aさんは「私も被爆者です」と言わされました。思わず自分の耳を疑いました。あまりにも唐突で突然すぎて、私はしばらく言葉が出なかつたのです。何とも形容しがた



早川 京子（柏原支部）

は十二歳のまま今でも天国で、日本の状態を見つめているのではないだろうか。

私は全国のお母さん達に大声で訴えたい。「私達の子供を二度とあのよき目に合わせてはいけない」と。

は十二歳のまま今でも天国で、日本の状態を見つめているのではないだろうか。

私は全国のお母さん達に大声で訴えたい。「私達の子供を二度とあのよき目に合わせてはいけない」と。

い空間が流れ、私の頭は困惑してしまった。負う事もなかつたのですが、市内の会社におられたお父様とお兄様は、被爆死されました。三日間というものの広島市内は火の海だったそうです。火がおさまり、本社からも救助にかけつけ、Aさんは大八車を引いてお父様を搜されたそうです。町は黒こげになつた人の山であり、銀バ工が被爆死した人間の上に真黒におおいかぶさり、Aさんは前の日にも黒こげになつた人達の姿が今でもこの目に焼きついていました。当時十二歳だった少女がその地獄のような光景を、どのように感じ受けとめたのでしょうか。Aさんは「私は本当に何も感じなかつた。悲しくもない、怒りも恐怖も何も感じなかつた」と。

一週間目にしてやつとお父様を捜し出されました。それからお父様、お兄様、外地で戦死されたもう一人のお兄様、三人一緒にお葬式を出されたそうです。「母も泣かなかつた。私も泣かなかつた。誰一人として涙を流さなかつた」。涙なんか出なかつたんですね。人間の感情さえも失くしてしまつ恐ろしい原爆。

「今でも広島には被爆した友人、死んでいます。

す。できる事なら自分の記憶の中から消してしまいたい。お願いだから被爆者をそつとしておいて欲しい」。涙を流しながら切々と訴える様に話されたAさん。貴女の勇気にとっても感動しました。被爆者にとって古傷に触れられる事は私達の想像を絶するものがあると思います。でも忘れないで欲しい、誰が伝えてゆくのですか、戦争の恐ろしさを。

現在Aさんは原因不明の高熱に苦しめられました。被爆者にとって本当に忘れない、當時を語る事はとてもたえ難いつらい事なんです。私は心が痛みます。お願いです、これを読んで下さった皆さんが一日も早く、元の健康な身体を取り戻すよう心から祈つて下さい。

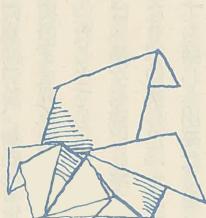
物心ついた頃には世の中戦時色で染まつていました。千人針や配給、防空演習といった騒然とした時代で、商人であった父も商売が出来なくなり、軍需産業にかり出されて行かざるをえなかつたのです。

家族は大阪市内に住んでいましたが、戦局も不利になりつつあった昭和十九年に母の里（大阪府能勢町）である山深い村へ疎開となり、大阪から大八車で荷物を運びました。毎日が気兼ねと不安な日々を子どもながらに送っていました。大阪の空襲で空が真黒になり、まるで日食の様になつたのをはっきりおぼえています。

Aさんは爆心地から離れていたため火傷を負う事もなかつたのですが、市内の会社におられたお父様とお兄様は、被爆死されました。三日間というものの広島市内は火の海だったそうです。火がおさまり、本社からも救助にかけつけ、Aさんは大八車を引いてお父様を捜されたそうです。町は黒こげになつた人の山であり、銀バ工が被爆死した人間の上に真黒におおいかぶさり、Aさんは前の日にも黒こげになつた人達の姿が今でもこの目に焼きついていました。当時十二歳だった少女がその地獄のような光景を、どのように感じ受けとめたのでしょうか。Aさんは「私は本当に何も感じなかつた。悲しくもない、怒りも恐怖も何も感じなかつた」と。

一週間目にしてやつとお父様を捜し出されました。それからお父様、お兄様、外地で戦死されたもう一人のお兄様、三人一緒にお葬式を出されたそうです。「母も泣かなかつた。私も泣かなかつた。誰一人として涙を流さなかつた」。涙なんか出なかつたんですね。人間の感情さえも失くしてしまつ恐ろしい原爆。

「今でも広島には被爆した友人、死んでいます。



道野 京子（羽曳野支部）

終戦の時、国民学校一年生でした。私が誕生した時、すでに日支事変が始まつていて、

Aさんは爆心地から離れていたため火傷を負う事もなかつたのですが、市内の会社におられたお父様とお兄様は、被爆死されました。三日間というものの広島市内は火の海だったそうです。火がおさまり、本社からも救助にかけつけ、Aさんは大八車を引いてお父様を捜されたそうです。町は黒こげになつた人の山であり、銀バ工が被爆死した人間の上に真黒におおいかぶさり、Aさんは前の日にも黒こげになつた人達の姿が今でもこの目に焼きついていました。当時十二歳だった少女がその地獄のような光景を、どのように感じ受けとめたのでしょうか。Aさんは「私は本当に何も感じなかつた。悲しくもない、怒りも恐怖も何も感じなかつた」と。

一週間目にしてやつとお父様を捜し出されました。それからお父様、お兄様、外地で戦死されたもう一人のお兄様、三人と一緒にお葬式を出されたそうです。「母も泣かなかつた。私も泣かなかつた。誰一人として涙を流さなかつた」。涙なんか出なかつたんですね。人間の感情さえも失くしてしまつ恐ろしい原爆。

「今でも広島には被爆した友人、死んでいます。

あつたので町にはなかなか帰れませんでした。心配していた父も無事で昭和二十一年秋、父の会社の社宅があつた吹田へ帰ることができました。吹田での生活も大変でした。食糧難は相変わらず満足な食品は出廻っていました。わざかな庭に野菜を作り、私と弟は学校が休みになると田舎に行っていました。

戦争のつらさ、怖さは私の歳で記憶が終りだと思われます。だんだん戦争体験が風化しています。私の叔父と従兄は戦地に行つたまま帰つてこないのです。もう二度と戦争があつてなるものですか。だのに今なお世界のどこかでは戦争がおこなわれている。一日も早く戦争のない平和な世界が来るなどを、全人類が努力しなければならないと思います。

友は青い果実のまゝ消えた！



神谷 英子（羽曳野支部）

貯水場の隣りのK軍需工場での思い出は、私の心中に今でも濃密に残つてゐる。

秘密兵器の信管の組立てが私たちに与えられた仕事だった。朝の八時から夕方五時まで、おいたてられるように続いた作業。パレンバン作戦での皇軍の勝利は「あなたの方のものですね。これからも、軍國の乙女として大いに頑張つてもらいたい」と若いインテリ工場長から激励をうけたのもつかのま、そのあと新しい部品は来なくなり、毎日、オシャカになつたヤツをほどいては、あっちこちヤスリをかけたり、布で磨いて組立て直す、だるい毎日が続いた。

工場は裏日本に疎開したといふ噂が流れ、それと同時に男子の工員はそつちに行つた。残つたのは、私たち百人程と、浜松かどこかの遊廓から来た女子挺身隊百人余りだった。

男は交替した工場長一この男は脂ぎった、みると元気上りの軍人だったと、現場監督と炊事の男が何人かいたが、あとは女ばかりで、仕事は暇で火の消えた状態だった。私たちの校長は何度も動員解除を申し出たが、脂ぎった工場長はなかなか「うん」といわなかつた。では午前中だけでも授業させてほしいと執拗に私たちと一緒に頼んで、やつと聞き入れてもらつたが、そのころから夜間の空襲が頻繁で、せっかくの授業も、半分居ましい警戒警報のサイレン、続いて空襲警報



「お母さんが死んでしまった」

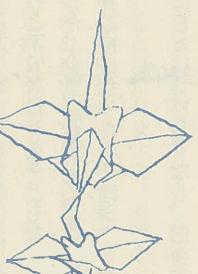
東京四谷の幼稚園を卒業して五十年余りとなりますが、今もなお、あじけなく笑いかけてくれる友の顔を眺めていると、涙で写真が曇ります。

男児は陸軍か海軍の大将に、女兒の殆どはお嫁さんになるのが将来の夢だったとか…。当時、御両親は勿論、幼かつた貴方達たつてもみなかつたことでしよう。

小学校では「男女七歳にして云々」と、クラスは別になり、仲よしだった男の子と廊下や道で会つても話しても出来なくなりました。五年になると中等学校への激しい受験勉強が始まり、女学校に入学するや満洲国独立、二・二六事件、支那事変と国内は戦勝戦敗と浮き立つ中にも、次第に血なまぐさくなつてきました。昭和十五年、晴れて憧れの大学生になつたのも束の間、十二月には第二次世界大戦の火蓋が切つて落され、友はペンの変りに銃を肩にして学徒兵として出陣して行きました。

四谷区で集団の壮行式当日、私達も蔭ながら友を見送りましたが、「後輩の諸君／僕たちの名譽の戦死の報を耳にしたら、僕らの屍を乗り越えて御國の偽に戦つて下さい」と、りりしい挨拶に答えて、時の紅一点、川上指揮の「死ぬばかりが御國の偽になるのではありませんよ。命を大切に必ず生きて凱旋して下さい」と、時局に反する激励の言葉は、今もなお忘れることが出来ません。

然し、この言葉も空しく、この時、出征した。夾竹桃の紅



堀本 澄子（金剛支部）

夾竹桃の紅い花が咲いている。「肉の紅だ」何の脈絡もなしにそう思うのは、私一人だろうか。少女時代を戦争、戦争で送つた私にとつて、とりわけ、敗戦の年、学徒動員で柴島日を以つて、動員を解除する」と宣告した。

「氣をつけて家へ帰り給え。」た学徒の殆どが南の孤島や海上で、食べる物もなく、末期の水もすすれないままに、消えています。友よ！うすれゆく意識の中で最後に、貴方街にも、家の中にも食物や玩具や電気製品など一杯で「辛ばう」「忍耐」などの言葉は、子育てにはもう死語となつてゐる様な今日この頃ですが、その幸福に酔いしぬ、こんな私の悲しい思い出を繰り返すことなく、心身ともに健全に生きぬいて下さい。

永遠の平和を祈りつつベンを置きます。

友よ！うすれゆく意識の中で最後に、貴方街にも、家の中にも食物や玩具や電気製品など一杯で「辛ばう」「忍耐」などの言葉は、子育てにはもう死語となつてゐる様な今日この頃ですが、その幸福に酔いしぬ、こんな私の悲しい思い出を繰り返すことなく、心身ともに健全に生きぬいて下さい。

友よ！うすれゆく意識の中で最後に、貴方街にも、家の中にも食物や玩具や電気製品など一杯で「辛ばう」「忍耐」などの言葉は、子育てにはもう死語となつてゐる様な今日この頃ですが、その幸福に酔いしぬ、こんな私の悲しい思い出を繰り返すことなく、心身ともに健全に生きぬいて下さい。

友よ！うすれゆく意識の中で最後に、貴方街にも、家の中にも食物や玩具や電気製品など一杯で「辛ばう」「忍耐」などの言葉は、子育てにはもう死語となつてゐる様な今日この頃ですが、その幸福に酔いしぬ、こんな私の悲しい思い出を繰り返すことなく、心身ともに健全に生きぬいて下さい。

た学徒の殆どが南の孤島や海上で、食べる物もなく、末期の水もすすれないままに、消えています。友よ！うすれゆく意識の中で最後に、貴方街にも、家の中にも食物や玩具や電気製品など一杯で「辛ばう」「忍耐」などの言葉は、子育てにはもう死語となつてゐる様な今日この頃ですが、その幸福に酔いしぬ、こんな私の悲しい思い出を繰り返すことなく、心身ともに健全に生きぬいて下さい。



兵器工場で働く『女子挺身隊』

私が生き残ったのは、全く偶然である。もし、B29の爆弾が向い側の堤防の外側に落下していたら、私たちの生命はなかつたのだ。偶然の幸運に私はぼうとして、言葉もなかつた。

偶然とはいえ、幸いに生き残った私は、戦争を知らない若い世代に、再び戦争は繰り返すまいと強く叫ばずにはいられない。夏の日には咲く夾竹桃の紅い花に「裂けた肉の色」を連想する私のような悲惨な経験を味わうことのない、平和な世界を！

つていった。長柄大橋まで来て、あつと思わずいきをのんだ。男とも女ともわからぬ、泥と血まみれの屍が、かさなりあって倒れているのだ。その下の河川敷には、流れの方に頭をむけてうずくまつた人の列、目と耳と鼻をしっかりと両手でおおつて。その人たちは動かなかった。河中に落ちた爆弾の爆風で一瞬の内に生命を奪われたのだ。道路上の汚れた屍と対照的に、まるで今にも動き出してくれる生前の姿を保つて死んでいった人々の列。

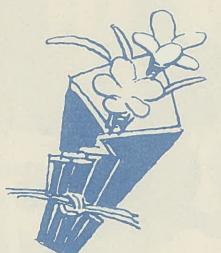
人の中国の少女がいた。私と同じ位だったから、八歳位の少女だった。零下數十度の中、彼女の足には布ともいえないとぼろざれが靴がわりに巻かれ、手には針金で作った小さな熊手を持ち、石炭ガラが冷えるのをまって、燃えカスからコーケス状になった石炭を選び分け、背にしょった姿につめて帰っていく。それは、彼女達の大切な燃料になるのだ。

或る日、私も少女の横に並んで、石炭と一緒に拾つた。黙つて差し出す燃えカスの石炭を、彼女も黙つてうつむいて受け取つた。私にとっては、それはチョット変つた遊びに過ぎなかつた。理不尽に植民地にされ、侵略者である日本人が、豊かな生活をしている。自己でありながら、極限の生活をしいられていた彼女の胸の内を思う時、幼なかつたとはいへ、私は己れを、現在も責め続けている。

私の知つてゐる数少ない中国語の中で、強く印象に残つてゐる言葉がある。没法子。「メーフアーズ」と読む。訳すと「しかたがない」とか、「諦めた」という意味だが、彼等は良く口にした。この言葉を聞くたびに、当時の私は、中国人を非常に無氣力な人間とみていた。理不尽な日本人の暴力にも、没法子と諦めてしまつたを、単に国民性の様に思つていたのだ。しかし、あの日を境に、無氣力にみえていた彼等の胸の中に、赤々と燃えていた抗日の力と、輝く目を見た時の驚き、耐えて、耐えて、耐えぬいた顔は、中国人の底知れぬ力を知つた驚きであった。

私にとつての戦争体験とは、弾丸の雨の中

満州。
十歳の八月十五日

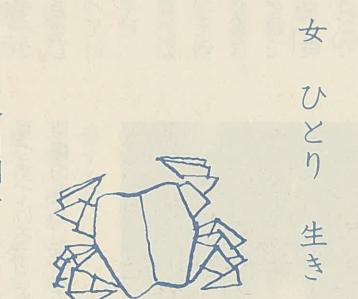


高橋 順子（泉北支部）

いつの頃からか、私は、終戦と言つての言葉を聞くたびに、或る種の違和感と共に、日本人的の発想に対する嫌悪感を持つ様になつた。そして、必ず心中で敗戦と、言葉を置きかえている。

あれは、まさしく、国民を無謀な戦争にひ

を逃げまどつたことでもなく、当時の人並の飢えの体験でもない。侵略した側の人間として、あの国の多くの子供達が、嚴冬にボロにくるまれた素足を語ることにつきる。いつの場合も、名もなき人々が、一番ひどい目に会い、語りつかれる事もなく死んでいった戦争。私は加害者の立場で我が子に戦争を語りつぐ。



女ひとり生き

長谷川朝子（新金剛支部）

一九三〇年代に端を発した第一次世界大戦では、二百万にのぼる若者が戦場で生命を失つた。そしてその陰にあって当然この若者たちと結ばれるはずの女性たちが、自身のまま自立の道を歩くことになつた。その数は五十万とも百万ともいわれているが、私もそのうちのひとりである。

当時十九歳。戦争中はお国の為に、そして終戦後の困難期を家族の為に、そして

書き込み、敗れた戦いだつたはずだ。終戦等と言つ、きれい事の言葉で、ごまかして欲しくないという思い込みがつねにある。多くの戦争体験文を読むと、被害者としての立場から書かれた内容は、あの当時を生きた世代にとつて、他人事でない自己の体験と重複して、より理解しやすいことだ。しかし、私にとつての戦争体験は、加害者としての方がより鮮明に胸にあり、敗戦三十七年たつた今も、消えることはない。

当時、侵略者としての立場を理解するには、私は、あまりにも幼なすぎた。多くの日本人が、幻の王道樂土を夢みて渡満し、中国人労働者を苦力と呼び、家畜の如くこき使つた。我が家も例外ではない。我家は、旧満洲の鞍山市にあった。鞍山は鉄の都とも呼ばれ、工業都市として、日本の大企業が続々と、この地に工場を造り、街の一等地はすべて日本人街として接收され、中国人は、荒地の果てのゲットに追いやられていた。南満とはいえ中国の冬は厳しい寒さである。零下數十度という寒さの中で、彼等は、満足な衣食住もなく、今にして思えば、いかにして生きながらえ、この日を迎えたのだろうか。忘れられない胸痛む事柄を、思い出すまさに記してみたい。

嚴冬の中国の暖房は石炭だった。我が家は、全室スチール暖房で、地下室にボイラー室があり大量の石炭を燃やしていた。十歳位の中国人の少年が、一日中地下室で石炭にまみれ真黒になつて働いていた。朝、石炭の燃えがらを、大量に搬出する。いつもそれ待つ一聞くようになつてきている現在である。

今から十五年前、藤沢市の大久保さわ子さんの呼びかけで独身婦人連盟が誕生した。当時はマスコミにも派手に取り扱われたとか。しかし私はそんなことも知らず、のんきに二十歳代で出来なかつたスキーに登山に旅行にと楽しむ一方で仕事に打ちこんでいたのである。そして五十歳近くになつて入会することにした。やはりおんなひとり、老後が心配である。今の女性たちもそろそろ六十歳の声を訴えねばならないと思つたからである。

一九八〇年十二月九日、私たち独身女性の悲願の女の碑が嵯峨野の常寂光寺のひとすみにひつそりと建立された。

「女ひとり生き

ここに 平和を希う

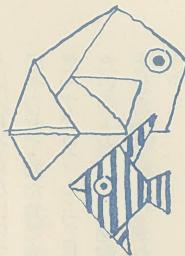
今は「さき市川房枝先生の字がくつきりと石の上にぎざまされている。

二度と再び戦争はいやだ。選んでの独身、納得ずみの独身ならそれもいいだろう。世の中はだんだん変わつていくのだから。でも相手がいなくて選ぶ権利もないなんて。

今その第二の波、団塊の世代が来ていると言

われている。これも戦争のきずあとだと思う。一度京都に行かれた折にはぜひ「女の碑」を、そして女ひとり生きたあかしをたしかめて下さるよう、お願いする。

悪夢のような日々



松阪 久枝（布施支部）

私が、二度目の召集で戦場に向かったのは、支那事変以来はてしなく戦火が燃え拡がつて行く昭和十六年の春だった。四歳だった私は、泣きながら父の袖にすがりついて、大人たちが止めるのもきかず、入隊先の浜松練兵所までついて行った。父親似だったという私の幼な心に一度と会えない予感でもあつたのだろうか。それが父の顔を見た最後の日となつた。

昭和二十年、父の戦死の報せが我が家にもたらされた。母のその一ヶ月前から幾度となく、父が夢枕に立つのを見たという、一枚のハガキで連れ出され、そして一片の遺骨も運ばれては来なかつた。父は南の島に向かう輸送

に耐えて世を去つた薄幸な姉を思いだす度、私はこみあげる涙を押えることが出来ない。

母と小さな子供たちの必死な生活のなかで、時折、米軍から戦没者の遺族に食糧などの配給がもたらされた。空腹の毎日、私たちは子供心にそれがどんなにめずらしく嬉しかったことか。しかし近所の人々はねたみやつかみ、聞こえよがしに私たちをののしった。

母は地元の旧家の出で、生活の豊かな親類は多かつたが、誰一人暖かい手をさしのべてくれなかつた。敗戦後の国土の荒廃・混乱は人々の心まで荒み切つたものにしていた。

そうした辛い日日のなかで、偶然父の戦友が訪ねて来た。輸送船が敵の魚雷攻撃を受け沈没する前、甲板で父と将棋をさしていたというその人は、私たちを長い間さかしていたそうだ。その人は九死に一生を得て故国のかどを踏んだが、そのよろこびも束の間、妻子

船と運命を共にし、南冥の海の底に横たわっているだろう。

それからの母子五人の戦後の生活の辛苦は、なんでも運送店は人手に渡り、母は生活の糧を得るため、女の細腕で昼夜をわかつず必死になつて働いた。小学二年生だった私は、炊事洗濯、妹の世話を母を助け、勉強する時間もなかつた。四歳上の姉は病魔にとりつかれ、病床で身動きならぬ身体で、私に家事にについて指示したり心をくだいた。その姉も、充分な手当も受けられぬまま冥界の人となつた。母の苦労を察し我まま一つ言わず、苦痛に耐えて世を去つた薄幸な姉を思いだす度、私はこみあげる涙を押えることが出来ない。

母となり、貧しいながら平和な毎日を送つてゐる。亡父の戦友だったその人はいま、どのように暮らしているのだろうか。戦争は、市井に生きる人々のつましい生活、さざやかな幸わせさえ破壊しつくしてしまつ。パスクルは、川をへだてて笑顔で語り合つていた善良な農夫たちが、ある日から、歯をむき出して殺し合わねばならぬ戦争の残酷と悲惨について書いている。

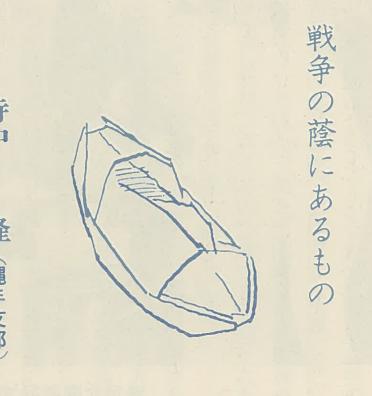
私たちは戦後の長い年月を平和な社会に生きている。しかしながら地球上のどこかの国で銃声が響き血が流れ続けている。私は父を殺され、姉を失つた。私たちの子供たちまで殺されたくはない。平和な生活が永遠に続くことを心から願つてゐる。だが、腐敗しちつた政治家たち、悪徳商人たち、巷に氾濫する俗悪な「文化」に人々の良識が麻痺し、子供たちまでが未来の夢を見失つてゐるかのよう世情に、だれがあの悪夢の日々が二度と訪れないか信じるだろうか、ときおり私は父を戦場に連れ去られたときのような暗い予感におびえている。

私たちは戦後の長い年月を平和な社会に生きている。しかしながら地球上のどこかの国で銃声が響き血が流れ続けている。私は父を殺され、姉を失つた。私たちの子供たちまで殺されたくはない。平和な生活が永遠に続くことを心から願つてゐる。だが、腐敗しちつた政治家たち、悪徳商人たち、巷に氾濫する俗悪な「文化」に人々の良識が麻痺し、子供たちまでが未来の夢を見失つてゐるかのよう世情に、だれがあの悪夢の日々が二度と訪れないか信じるだろうか、ときおり私は父を戦場に連れ去られたときのような暗い予感におびえている。

母となり、貧しいながら平和な毎日を送つてゐる。亡父の戦友だったその人はいま、どのように暮らしているのだろうか。戦争は、市井に生きる人々のつましい生活、さざやかな幸わせさえ破壊しつくしてしまつ。パスクルは、川をへだてて笑顔で語り合つていた善良な農夫たちが、ある日から、歯をむき出して殺し合わねばならぬ戦争の残酷と悲惨について書いている。

それから三十数年が過ぎ去り、私は二児のじみ眩いでいた。

母となり、貧しいながら平和な毎日を送つてゐる。亡父の戦友だったその人はいま、どのように暮らしているのだろうか。戦争は、市井に生きる人々のつましい生活、さざやかな幸わせさえ破壊しつくしてしまつ。パスクルは、川をへだてて笑顔で語り合つていた善良な農夫たちが、ある日から、歯をむき出して殺し合わねばならぬ戦争の残酷と悲惨について書いている。



寺中 隆（繩手支部）

昭和二十年八月、応召間もない私は、関東軍の一砲兵として、沖縄の決戦場へ赴くべく奉天（現在の瀋陽）でその編成を急いで居りました。ところが突如十五日の終戦を迎えて、部隊はソ連兵により、武装解除を受ける事となり、混乱のまっただ中になりました。

当時、新京（現在の長春）に家族を残して居りました私は、このままソ連に連行されるよりも、九死に一生を期しても、なんとか脱出したいた一心で新京の吾が家に帰つて参りました。帰つてみますと、なんと妻や父母は当時、父の勤めて居ました德慶（新京とハルピンの中間にある小さな街）に避難して居る事を知らされたのです。北方より統々と、南へ、南へと祖国に一步でも近づこうとする避難民の群が続いて居る最中に、逆行して北方に向かうとは危険この上ない事だと周囲よ



空襲は非戦闘員も区別なく焼き殺しました

り強く反対を受けましたが、再び家族のもとに行くべく決意を固めた私は、現地人に姿を変え、やつとの思いで徳慶にたどり着き、この街の日本人の消息を聞きますと、日本人は全部、小学校に収容されて居るとの事でした。現地人の服装をした私が、突然、寺中と指名して尋ねて行つたのですから、顔は真っ黒に煤を塗り、お腹には綿を巻いて妊娠を装い、ソ連兵の眼を逃れていた妻は、一瞬、連れに来られたのかと蒼白になつたそうです。

二三、三三、言葉を交わす暇もなく、ソ連兵が訪ねて来た。母の日課のような掠奪とマダム・ダワイ（婦女暴行）の訪問です。早速頭から毛布をかぶされた私の上に、室内が座り、ソ連兵の眼を盗みながら話してくれたところによる。男たちはそこから二時半ほど離れた公民館に移されて居ることで、ここで見つかれば脱走兵として逮捕されるから急いであちこちに移つてくれと泣き声で訴えられ、又も、そこを飛び出して行きました。

飛んで火に入る夏の虫よろしく中に入り込み、無事、父とも再会を果たし得たのですが、

戦争は終わりましたが、食べることに苦労しました。翌年の二月に人さまのお世話でこの地にまいり、たるいに疎開させていた次女一人も連れ帰り、親子六人で暮らす様になり、その時は嬉しうございました。苦しかった思い出も昔の話になります。

子供達も今は独立して毎日幸わせに暮らしており、主人が生きていてくれたら、今更ながら思いつつ、一日一日を精いっぱい、主人の分まで息子夫婦と共に、生きてゆきたく思います。

主人のおかげと、今さらながら主人のありがたさが身にしみます。もう戦争はこりごり、この様な苦しみを子供や孫達にさせたくはないません。

にいる主人の兄の家に世話になりました。でも私等三人はつらくていられず、又堺の姉の家に行き、七月の夜、また堺にて空襲にあり、再びはうりたされ、姉たちは焼け跡に小屋をたてましたが、狭くていつまでも世話になれず、京橋の兄さんの家に帰りました。

卷之三

100

満足な医薬品すらなく……

その後三ヶ月間、ソ連兵監視のもとに、実に苦しい使役の毎日が続いたのです。申し訳程度に野菜と豚肉の入った高粱粥をすりながら、掠奪物資をソ連本国へ輸送する為の一日至時間の重労働……それはまだ我慢できたものの、前夜、立入禁止区域に入つて来た現地人の射殺死体の後始末をさせられる時は、余りにも無残な仮の姿に腹の底から湧き上つてくる

うに心から願つてやみません。

な瞳等々……。

りを無心に踊り続けていた若い母親のうつろ

難途中に乳呑子を吾が手で始末し、そのショ

ックで気が狂い、昔、自分が育った故郷の踊

う。他に、褲一つに眼隠しされながら連れ去

られた行つた旧日本兵の後姿……あるいは避

す。

昭和十九年の七月、長男を一日の病氣で亡くし、悲しみも消えない翌年の三月十三日夜半、西成区にて空襲にありました。三歳の次男をせなにおい、三人の娘の手をとり、火の中をさまよい逃げのびたのです。そして近くの劇場に一時避難をして、朝を迎え、火ががずまり主人が西成区の家に行きましたが、あとかたもなく焼け野原になっていました。ようやく防空壕を捜し出し、逃る時砂をかぶせておいた米やふとん、着物類を掘り出して焼け跡で親子六人が食事をした時の嬉しさは、今も忘れられません。

三度の空襲に転々と
した日々

H · S (鴻池支部)



私は、七十三歳に成る女です。昨年、主人が七十六歳で亡くなり、淋しいにつは、共に苦労した空襲時代の事を思い出し、ベンを取ります。

近くの学校に避難して、夜があけてから家に帰ると、あとかたもなく焼け、防空壕うには一ぱい水がたまり、ふとんも米も水びたしで、ふとんは水で重くて持ち上げる事も出来ず、米は水にぬれて、それでも洗つて炊いて食べました。学校にいつまでもおれず、京橋

その後、私等には田舎がないので、私の姉の家にお世話になり、主人の会社の事があるので、成東区のしきに家を借りました。小さい娘二人をたるいの方に疎開をさし、親子四人が手をとりあって、その日その日を無事に暮らせる様、疎開をさした娘の事と共に祈りました。六月に一度目の空襲にあい、主人があとに残り消火につとめ、私等三人で、火の粉のふる中を東へと逃げましたが主人と会うことが出来ず、私はもうだめだと覚悟いたしました。その時に、長女の名を呼ぶ主人の声が聞こえたときの嬉しかった事、しみじみ

森美智子（大野芝支部）

まぶしい夏がもうすぐ来る。夏のイメージとして、楽しいレジャーと悲惨だった終戦が浮ぶ。私は一九七〇年生まれ。戦争体験者の証言を何度も見聞きした。しかしその数が次第に減っている。体験者の数の減少に、時の経過を加えている為だろうか。四十年の時が流れ、何故か軍靴の足音を聞いていたり甲とう。しげび寄るその足音を、近づけてはいけない。皆無にすることが、この世代の責任だと痛感する。体験していない戦争の「語り部」として、今を生きたいと思うのである。

「流れ星は生きている」という弓揚の一年間にわたる苦労を綴った小説がある。女手一つで、五歳・三歳・〇歳の幼な児を連れ溝州から朝鮮に入り、三十八度線を越えて生還した人の実話である。戦争の悲惨さに心を痛め、戦争の余波、人の心の荒廃の恐ろしさを嘆くものである。

君
死にたもうことなかれ

森 美智子（大野芝支部）

さを知つた。引揚者は、団を構成して行動を共にするが、日本人の間の盜難統出、デマの横行、弱者を顧みない言動。徹底した個人主義と排他主義、そして嫌悪感が人々を支配する。昭和二十年八月九日に移動を命ぜられた翌朝、新京を出発という政府の急な引揚命令会に、充分な金も物も持てなかつたことが、この難行に拍車をかけている。「私の病気は、三人の子供達の死を意味する。」と書いている。そんな環境の中、飢え、寒さ、子供の病気、そして体力の限界を越えて十日間山道を歩きぬいた三十八度線越え。実話であるから戦争に対する怒りを、一層身近に感じたのである。

最近この同名小説がテレビ化された。創作だと断わってはいるが、映像化された物の現

に悪人扱いし、アメリカや日本に対する批判は少ない。何十万、何百万の人間を殺しただけの、無意味な戦争に対する批判は感じられない。ドラマ作りの経済的、時間的な制約があるうが、現実遊離に危惧の念を抱いた。

戦争賛美、戦争体験風化の傾向を、最近特に感じる。マスコミからそんな風潮が起り、それが人々の心に浸透したら、人々の未来は消えてしまう。マスコミが権力方に圧迫されず、戦争の贊美や風化を止め、一人一人が戦争の悲惨さとその無意味性を正確に語れば、平和な未来はあるかもしれない。戦争へと駆立てたのも、戦争中に身内共々安全で快適な暮しをしていたのも、戦後の混乱期に私腹を肥やしたもの、一部の権力者である。一部の人間

に躍らされて命を失うのは、何と愚かなことだろう。戦争前夜になりつつある今を認識し、次の世代へ正確な情報を伝えることが、私たち一人一人の義務である。

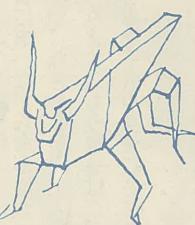
「君、死にたもうことなかれ（中略）

親はやいばを握らせて

人を殺せと教えしや」

（与謝野晶子の詩より抜粋）

人が死ぬのも日常茶飯事でした

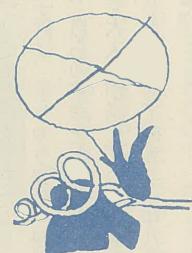


池上 しげる（泉北支部）

昭和二十一年三月九日、十日の横浜大空襲の前に横浜を去る。鹿児島で結婚式をあげるためにした。幸に空襲を避けることは出来ましたが、婚礼道具はすべて運送屋の倉庫で焼け、手もとに柳ごおりが二つ残っただけでした。主人は北京生まれで内地で生活した経験はなく、ずっと大陸で生活をしていました。身一つで五月に主人と式をあげました。主人の弟が、結核で市内の病院で療養して

げなかつたのだろうか。勇気を持つて声をあげていく必要性を痛切に感じています。生きとし生ける命を全とうすることが、いかに大切かを。（聞き書き・杉野淳子）

家族四人を失つて



東 清美（縄手支部）

昭和二十年一月、大阪も危くなつたからと、大阪市此花区の自宅には祖父母だけ残り、私達姉妹と幼い弟、母の四人は父の郷里、香川県琴平に疎開した。

三月七日、父の戦病死の公報が入り、大阪へ全員戻り、母と祖母が横須賀へ遺骨を取りに行き、この時、母は空襲にあった。

三月十二日、自宅で告別式だった。当時四歳、幼くいやしん坊だった私は、祭壇にまつられたお菓子をねだつたが、「明日になればね」となだめられた事を憶えている。その夜である。一階で祖母と母の三人で寝ていたが、急に叩き起された。裏の物干台に火の玉の様

な焼夷弾がかすつた。私達は着のみ着のまま夏ぶとんを頭から被り、あたり一面火の粉の中を近くの小学校の講堂へ避難した。ガラス窓から見える花火の様な情景を、震えながら朝まで待つた。夜が明けやっとおさまり、亲戚の人を探しに来てくれて、「もう家は焼けてしまつたよ」と言われ、辛いのは承知で母は焼跡を見に行ったとの事。そこには米びつ一杯入っていたお米が、まるで岩おこしの様に黒く固まりついており、銅の洗面器とが残つていただけだったと……。

親戚に身を寄せたものの、又今晚も危いかも知れないとの事で、すぐ疎開先の琴平に、母は父の遺骨を首からかけ、三人の子供の手をひき帰つた。

祖父母は大阪の親戚に残つた。でもそれ以来、祖父は息子を失い、ショックだったところへ空襲にあり、しばらくは放心状態だったそうだ。

それから半年ほどうちに、祖父母とも後を追う様に亡くなつた。

幼なかつた私であつたが、あの夜の事だけは、ハッキリと憶えている。

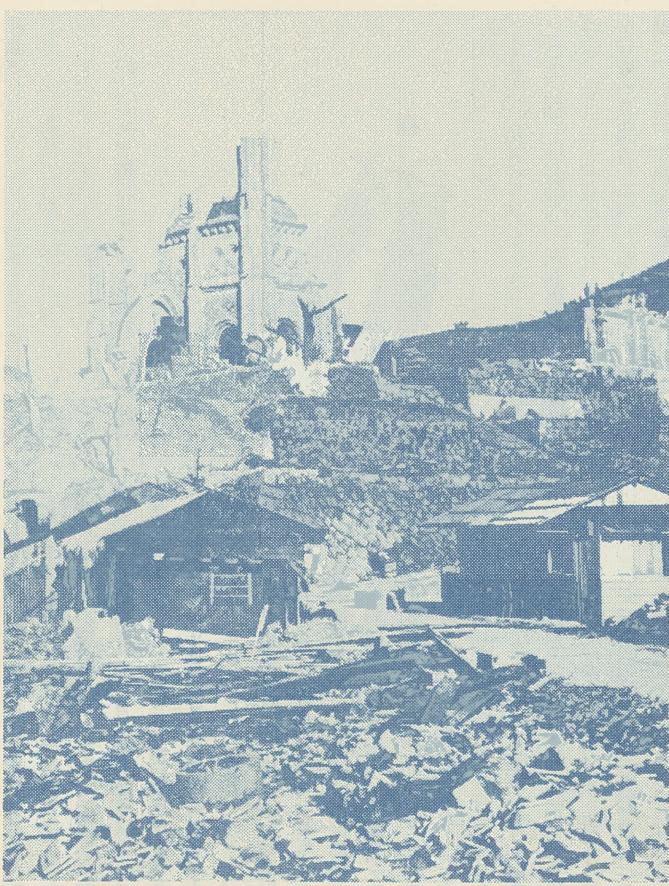
私の母は、三度空襲にあつてゐる。一度は父の事については、召集に行く時、家の前で、「行って来ます」と敬礼した直立不動の姿を忘れる事が出来ない。

私の母は、三度空襲にあつてゐる。一度は横須賀へ父の遺骨をもらいに行つた時、二回目は私も憶えている父の告別式の夜。三回目が疎開先で、幼かつた弟が病氣になり、高松で入院していた時の事だった。母は弟を抱え

おりましたのを、危ないからと引きあげた直後、大空襲に見舞われました。鹿児島のそれは、九九・九%破壊しつくされた。日本で旧埠と並ぶ、本当にひどいものでした。照明弾で照らして、主要な建物をねらいうちにするのです。パランьюートにつるされた照明弾は空中で止まり、その明るいこと、真夜中だというのに新聞が読めるほどでした。空襲の後、用事の為たびたび市内に出かけましたが、電車の停留所の壁に、人の目玉がピシャッとしてついているのや、血糊が飛びちらっているの

おりました。戦争中は人間性が麻痺して、人が死んだりしているのを見ても、日常茶飯事で、なんとも思わなくなつていました。鹿児島の特攻隊に弟が入つていましたが、飛行機などはなく、防空壕を掘る毎日だったそうです。

七月に北京に渡りました関門海峡まで米軍の潜水艦がきていた頃、主人は国鉄の労働者になりました。海峡を渡りました。終戦は北京で迎えました。今當時を振り返つて思うことは、悲惨な戦争になる前に、反対の声をあ



一瞬のうちに「死の街」に



太田 裕治（組織共同購入部）

私が少年時代、生れ育つた所は、現在の中華人民共和国で、当時は「満州国、関東州、金州」という名称でした。ここは最近の映画「二百三高地」の戦いで知られている「旅順」「大連」の近くで、日清、日露戦争の激戦の



子どもに「人殺し」を教える自衛隊

終ってから、お年寄りの人達は口々に、「いい映画を見せてもらい、本当にありがとうございました」といながら帰つていった。私は胸をなでおろした。「戦争って恐ろしい。原爆が憎い」と戦争を全く知らない子供達ですら、怒りをぶちまけていた。今年から修学旅行は広島に決定との事。この映画の事を少しでも頭の中に入れておいてくれている事を私は願つた。

私も戦事中に生まれたので、あまり大きいや頃は出来ないが、三歳ぐらいになった時だと思う。残り少ない記憶の中に、防空頭巾をかぶせてもらい、上の姉に手をひかれて、近所で殺されることもありました。そのため

勉強どころでなくなり、毎日が防空壕掘りと、避難訓練ばかり、敗戦も近い二十年頃になると「硫黄島」の玉砕等で、私達のまわりでも色々なテーマがとぶようになりました。

最後迄竹ヤリで敵を一人でもたおして死ぬのだ。女子供は、手りゅう弾を一個ずつ渡されるから、自らの命をたつこと、こうした事を本気で大人達が話しているのを聞かされた毎日でした。そして昭和二十年八月敗戦を迎きました。

今迄の占領国から敗戦国に。その国民に対して、当然のこととして、「中国人」や、ソ連軍の態度はきびしいものでした。敗戦による一時的無政府状態の中で、私達日本人は完全に無防備の状態でした。

一部「中国人」やソ連人にによる略奪、暴行がおこなわれ、日本人の多くが、祖国に帰る途中で殺されることもありました。そのため

地でした。私達の小学校教科書の中で「肉弾三勇士」の話が出ていたのを覚えていて、が、三人が戦つて戦死した場所でもあります。

私の小学校生活は、第二次大戦中でもあり、毎日の学業の中で、軍事教練があり、小学二・三年生なのに、銃剣術の教練をやらされました。自分の背たけよりも長い木銃を振りまわして、毎日訓練をさせられたのですが、子供心にも、こんなことをして何の役に立つのだろうかと思つたものです。

昭和十九年～二十年、第二次大戦も末期を迎えると、本国での空襲と合せて、「大連」も空襲を受けるようになります。そうなると、勉強どころでなくなり、毎日が防空壕掘りと、避難訓練ばかり、敗戦も近い二十年頃になると「硫黄島」の玉砕等で、私達のまわりでも色々なテマがとぶようになりました。

最後迄竹ヤリで敵を一人でもたおして死ぬのだ。女子供は、手りゅう弾を一個ずつ渡されるから、自らの命をたつこと、こうした事を本気で大人達が話しているのを聞かされた毎日でした。そして昭和二十年八月敗戦を迎きました。

女性は、髪を切り男装をして難をのがれる工夫をしたりしました。

私達家族が祖国日本に帰ったのは、敗戦後一年目の二十一年でした。九州佐世保港に入港したのですが、その時一番強く目に焼きついて印象に残っているのは、山々の線でした。やっと日本に無事帰つてこれたという気持ちでした。

戦争はいつも平和な家庭を破壊し、弱者のみが犠牲にされるものです。私の人生の中でも、小学生時代は空白です。小学生として、

女性は、髪を切り男装をして難をのがれる工夫をしたりしました。

私達家族が祖国日本に帰ったのは、敗戦後一年間だけでした。

私自身の経験からも、戦争の残酷さ生活の慘めさは、二度と味わいたくない事です。そして自分の子供達、将来の多くの子供達に、同じ思いをさせたくない、それが出来るのは現在の大人達であり、責任であると思います。

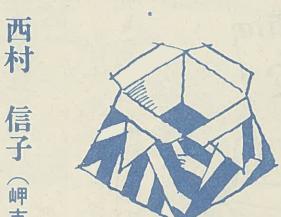
「人間を返せ」を見て



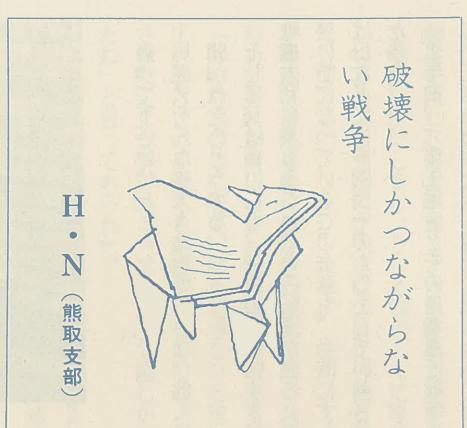
『浮浪児収容所』。戦争が生んだ孤児たち



小学高学年から幼稚園児、お年寄りまで集めて「にんげんをかえせ」の映画を上映した。当日は学校の先生の宣伝もあってか、沢山の生徒達が見にきてくれた。ムンムンする暑くて暗い部屋で、ワイワイ騒いでいた子供達も、フィルムが廻り始めたとたんシーンとなり、私は一瞬耳を疑つた。子供達は熱心に見てくれていたし、お年寄りの人達は涙を流して見ていた。

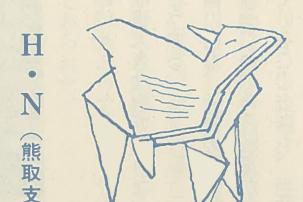


西村 信子（岬支部）



破壊にしかつながらない戦争

くよう願い、平和の鐘がいつまでもいつまでも我々の心に鳴り響く事を祈ります。



H・N（熊取支部）

昭和二十年、戦争も末期で毎日のように空襲警報が発令されていました。

病弱だった私は夜はいつも防空壕の中で祖母とねていました。そしてこの日、三月十三日の夜もこの防空壕の中で空襲警報を知らせるサイレンの音をきました。サイレンが鳴りやみ、「空襲警報やね、すぐ解除になるやろうか」と祖母と話しているとき、ブーンという飛行機の音がしてきました。「あつB29や」と体を壕の入口から出でて上を見上げたとき、真暗な夜空がぱッと明りました。「照明弾が投下されたんだ」とあわてて壕の中に入るか入らないとき、ヒューバリバリというのすごい音がして、道路ひとつへだてた家々が燃えあがりました。



難波駅頭で「平和」を訴える生協組合員

できなかつたのか」と。母の様に夫に生きて帰つてとすら大きな声で言えない様な世の中に誰がしたのか。今、その事を自分自身の為に、又、将来を担う子供達の為に真剣に考えねばと思う。

支部でSSDIIの為の街頭署名運動をした時、三〇歳前後の若い主婦、女子大生の無関心さにぞつとした。

「私達には関係ないでしょ。」「私達が反対したってどうしようもないよ。

又、中年の男性
「こんな事が本当に役立つと思っているのか
？」
これに署名して逮捕される事ないやろな。
人々の反応は様々。中には、「私は何にもできないからこんな時協力させてもらいます。」
と五百円カンパして下さった人もあった。

はじめての街頭署名でうまく呼びかけられるか、カンパなんてもらえるかと不安が一杯だったが、やり出すと度胸が着いてしまう本心さにぞつとした。

「私達には関係ないでしょ。」「私達が反対したってどうしようもないよ。

性が出て、いつの間にかカンパを言い出すタイミングもつかみ、あつという間に時間は過ぎた。そして何よりも戦争は嫌なんだと声・態度に現わし得た事。又、たとえ微力ながらも戦争に反対しましょ、と他の人々に呼びかける事ができたのが大きな成果だったと満足している。

一緒に署名運動に参加された人には、今年初めて運営委員になられた人達もおられて、「何時も家の中に居て、何もできないと思つていたけど、やってみればやれるものね。私も役に立つ事があるつてわかつて嬉しかったわ」と言っておられた。

ニューヨークでの署名贈呈式に山と積まれたダンボール一杯の署名。その一部に私達の本当に些細な運動も含まれていると思うと、やはり嬉しかったし、報告集会で贈呈式の時には「原爆を許すまじ」のハミングが流れると聞いた時も、署名して下さった人達のそれの表情や、署名してくれなかつた人達への怒りに似た気持を思い出し「この運動に私も参加したんだな」と感無量だった。

戦争体験が風化して来ている今、しつこさな行動を一つ一つ積み重ねて、戦争に反対しつけて行こうと思う。

私たち一人ひとりの力は小さくとも、一度と戦争への道だけは進まぬよう、声を大にしと叫びたい。

そのまま防空壕の中にいてはあぶないと、祖母に背負われてひなん場所へと逃げたとき見たものは、右も左も火の海。後も前も火の海でその大きな炎がゴーゴーと音をたて、風物が燃え落ちてくる。炎の燃えさかっている方へ泣きながら走っていく子、焼夷弾の破片でもあつたのでしょうか、頭から血を流して死んでいる赤ちゃんをいっしょうけんめいにあやしているお母さん、死体を踏みこえて逃げなければならないなど、当時六歳だった私も、地獄とはこんな所にちがいないと真剣に思いました。

一夜明けると、あたり一面焼野原でまだところどころくすぶつっている所もありました。家を焼かれた私達家族は、父の遠縁にある叔母の家にうつり住みました。その頃はどこも食糧難で配給の割りあてだけでは食べていけず、母も祖母も農家へ手伝いにいて、その帰りに大豆を少しとかおじやがを少しとうようつにわけてもらつてたようです。

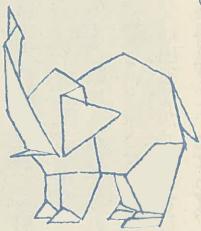
そして八月十五日正午、雑音がザアザア入ったきこえの悪いラジオのまえで、大人の人達が皆泣いています。どうしたの、なにがあったのと聞いても誰一人返事をしてくれません。放送の内容がわかつたわけでもなかつたのですが、私はこの時これで戦争が終つたんだと直感し「嬉しい」と思ったことを覚えています。

あの日から三十数年たつたいま、また防衛費が特別扱いされたり、「新空港に軍用港を

併用だとすぐ出来る」こんなニュースを聞くにつれ、広島、長崎でまだ原爆症で苦しんでいる人達のためにも、これから地球を抱つていく子供たちのためにも、破壊にしかつながらない戦争は絶対してはいけないと、声に出していいづけていくことが私達大人の責任だし、あの戦争をわざれないためにも、必要なことだと思います。

母の願いを街頭署名に
こめて

時岡 澄子（藤井寺支部）



帰つて下さい。

「馬鹿！そんな事大きな声で言うな。他人に聞かれたらどうする。」

そして父は幸いにも、近親の度が強すぎた。戦艦大和に乗りそこね、今の私達が在る。今、笑い話になっているこの会話も、当時にすれば母など正に非国民そのものとして糾弾されてしまう。

一年前、六年生児童とその母親達で戦争について語りあつた。子供達は言った。「どうし



1981年の「戦争写真展」にて